

目の冒険

錯視の話⑧

北岡 明佳

私が子どものころ、ウルトラマンというテレビ番組があった。ウルトラマンは正義の味方で、巨人なのに空も飛べるし、めっぽう強いのであるが、地上ではなぜか3分間しか活動できないのであった。

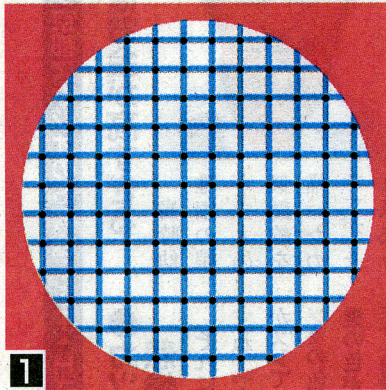
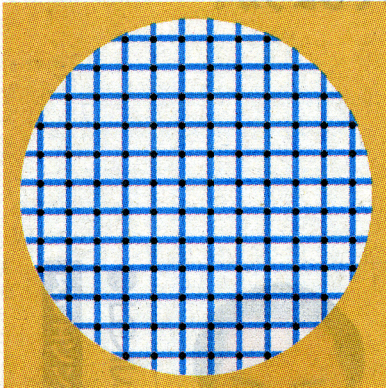
その胸には「カラータイマー」なるものが付いていた。

これは、クルマの燃料切れ警告ランプなどと機能が同じで、「エネルギー」が少なくなると点滅して、ウルトラマンがピ

点滅してもピンチじゃない

ンチに陥ったことを知らせる装置である(敵にもわかる?)。

錯視の世界にも「カラータイマー」がある。点滅していかないのに点滅して見える錯視のことである。



1

る。

■では、格子の交点には黒い丸があるだけなのだが、黄、橙、赤などに光って見える。

これは、きらめき格子錯視のカラー版である。

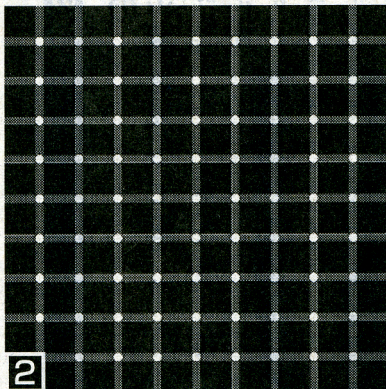
きらめき格子錯視の基本図形は■で、白い丸の中に黒いものが光って見える。

きらめき格子錯視では、視野の中心では錯視量が少なくなることから、一つ一つの神経細胞の担当領域(受容野という)の大きさとこの関係が検討されている。視野の中心を「見ている」神経

細胞の受容野は小さいからである。

なお、きらめき格子錯視が見えたからといって、何らかの病気というわけではないし、あなたがピンチに陥ったわけではない。

ところで、■の作品名は、源光庵(京都市)という寺院にある有名な窓の名前である。この「悟



2

りの窓は「迷いの窓」とセットになっているが、「迷いの窓」の英訳はwindow of illusionなので、「錯視の窓」と訳し戻せる。錯視は迷いだったのか。京都観光の際は、このようなトリビアも思い出して頂けると、さらに楽しいかもしれない。

(立命館大助教)

1筆者作「悟りの窓」
2きらめき格子錯視。シュラウフ・リングエルバッハ・ウィストが97年の論文で発表した